体育科　研究主題

子どもの協働する力を高める指導の工夫
－第５学年「ネット型」の指導を通して－

浅　間　聖　也

〈研究概要〉

本研究では、児童の協働する力を育むことを目指し、指導の工夫を行った。ここで言う協働する力とは、他者と協力して課題に取り組む力のことである。今回は、協働する力を高めるために必要なものを、子どもの内面にあるものと周囲にあるものに整理し、それに応じた指導の工夫を行うことで、協働する力を高められるようにした。

具体的な手立てとして、３つの手立てを講じた。１つ目は、子どもが「やればできそう」と感じる学習内容が明確になった深まりのある教材の工夫を行った。２つ目は、協働する力と強く関わるものである、共感性やコミュニケーションスキルに着目した発問の工夫を行った。３つ目は、子ども達の協働的な学びの姿に対して教師がフィードバックを行った。

その結果、児童に協働的な学びの姿が生まれ、児童の協働する力を高めることができた。

〈キーワード〉

協働、共感性、コミュニケーションスキル、発問、教材、フィードバック、ネット型

Ⅰ　研究主題について

１　主題設定の理由

我々、教育者には、目の前の子ども達が将来、社会で活躍し、幸せに生きてほしいという共通の願いがある。しかし、現在は、VUCA の時代と呼ばれるように、予測困難で不確実、複雑で曖昧な世界になっている。この中で、我々、教育者は子ども達に、どのような力を育んでいけばよいのだろうか。私は、今の時代を生きる子ども達にとって、大切で欠かすことのできない力の一つに、協働する力があると考える。ここで言う協働する力とは、他者と協力して課題に取り組む力のことである。では、なぜ、他者と協力して課題に取り組む力が大切か。

国や文化、社会が変われば、それに応じて幸せに生きるために必要な力は変わってくる。複数の国が参加する OECD が始めた DeSeCo プロジェクトでは、どのような場面でも役立つ汎用的な力（コンピテンシー）が整理された。その後、OECD は、コンピテンシーを構成する要素（コンストラクト）の１つに協働性があると述べ、協働性は現代社会の複雑な課題に対応し、成功するために必要不可欠な能力だと捉えている。また、日本でも、OECD の影響を受け、令和の日本型学校教育が示された。その中では、子どもの資質・能力を育成するための手段として、協働的な学びの充実を掲げ、協働的な学びの大切さを説明している。また、櫻井(2024)も子どもにとって重要な非認知能力の一つに協働性があると説明している。これらのことからも、協働することの価値や、子ども達の中にある協働する力を高めることの大切さが分かる。

私の今までの教師人生の経験からも、協働する力を高めることは必要なことだと感じている。私は、学びは様々なこととの関わりの中で行われ、その一つに他者があると考える。子ども達が他者の様々な考えに触れながら学ぶことで、今までになかった考えが生まれたり、よりよい課題解決ができたりしたという経験がある。令和４年度にスポーツ庁が行った、全国体力・運動能力、運動習慣等調査の質問項目に「体育・保健体育の授業でできなかったことができるようになったきっかけ、理由」がある。その質問に対する、子ども達の回答で一番多い選択肢は、小・中学生ともに「友達に教えてもらった」である。子ども達の側から見ても、他者と協力することに価値を感じ、できなかったことができるようになったと効果を実感していることが分かる。これらのことからも、私は、協働する力が高まることで、子ども達が将来、社会で活躍し、幸せに生

きる可能性が高まると思っている。

私は、子ども達が協働的な学びをして、協働する力を高めていくために、いくつかの要素があると考える。まず、協働的な学びをしていくために必要な要素を、子どもの内面と子どもの周囲に分けて考えた。子どもの内面にある協働する力と強く関わるものは、相手の立場に立って他者を思いやる力である共感性と、他者との交流を円滑にする力のコミュニケーションスキルである。また、子どもの周囲にあるものとしては、自分の考えや思いを安心して発信できる環境や雰囲気のことである心理的安全性と、子どもが、「やればできそう」と感じる学習内容が明確になった深まりのある教材である。そして、協働する力を高めるためには、教師が、協働する力と強く関わるものである共感性やコミュニケーションスキルをもとに発問の工夫をしたり、子ども達の協働的な学びに対してフィードバックをしたりしていくことが必要だと考えた。これらのことについてまとめたものが図１の協働的な学びが生まれ、協働する力が高まるイメージである。

今回の実践研究は、体育科の授業を通して行う。体育科でしか学べない協働的な学びとして、言葉を介せずとも行うことのできる、身体的な関わりを通して行われる協働的な学びがある。この協働的な学びは、他の教科では学ぶことが難しい体育科ならではの学びであり、体育科を行う価値である。そのため、身体的な関わりを通して行う協働的な学びはどのような手立てを行えば、生まれるのか。また、協働する姿に対してどのような手立てを行えば、協働する力は高まっていくのかを検証していきたい。

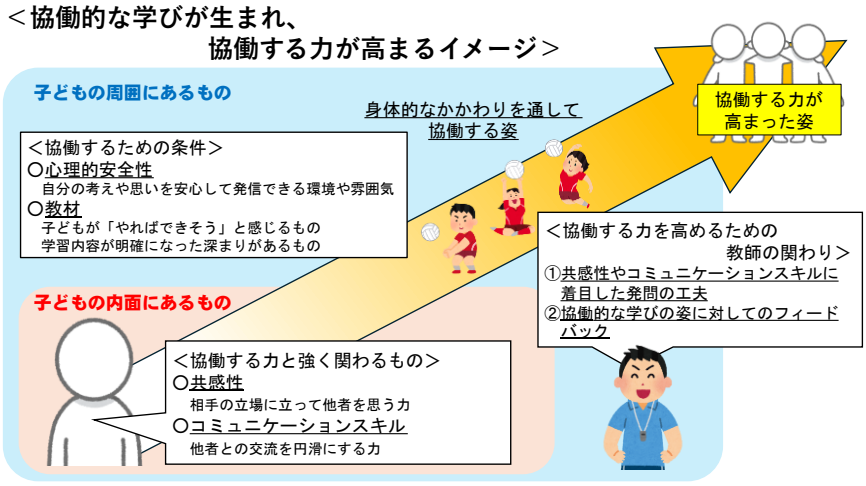


図１ 協働的な学びが生まれ、協働する力が高まるイメージ

２　教科の研究主題との関わり

体育科では、「主体性を育み、運動への有能さを認知することができる体育授業の工夫」という研究主題を掲げている。目指す児童像は「子ども達の学び続ける主体性を育み、子ども達が有能さを認知することができた姿」である。「学び続けるための主体性」が育まれた姿の中に、他者と協力して課題に取り組む姿も含まれている。以上の点において、本研究は教科の研究主題と関わっている。

３　主題にせまるための方策

研究主題にせまるため、視点と手立てを講じ、実践を通して検証する。

視点
協働する力を高めるために必要なものを、子どもの内面にあるものと周囲にあるものに整理し、それに応じた指導の工夫を行うことで、協働する力を高められるようにする。

＜手立て＞

(1)　子どもが「やればできそう」と感じる学習内容が明確になった深まりのある教材の工夫を行う。

今回の教材では、技能差に関わらず、やればできそうと感じられる工夫を行う。また、子ども達が勝つために、チームの一人一人が役割をもって関わりたくなるようなルールの工夫をする。

(2)　協働する力と強く関わるものである、共感性やコミュニケーションスキルに着目した発問の工夫を行う。

身体的な関わりを通して協働することができるよう、発問を通して、子ども達が、相手の立

場に立ち他者を思いやることをきっかけにして、プレイについて考えられるようにしたり、どんなコミュニケーションをすればプレイが上手くいくか考えられるようにしたりする。

(3)　子ども達の協働的な学びの姿に対して教師がフィードバックを行う。

教師が子ども達の協働的な学びに対して評価をし、次の学びに繋げられるようにする。よい協働的な学び方ができているチームにはなぜその学び方がよいのか伝え、できていないチームには改善の仕方や上手くいかない理由を伝えられるようにする。

手立てに関わる検証方法

(1)　協働的な学びの姿であったかを授業中の姿の観察から見取る。

単元前半と単元後半（本時）での協働的な学びを記録し、協働的な学びが生まれていたか検証する。

(2)　協働性を測定する質問項目を行う。

協働する力が高まっていたかを、櫻井(2024) が提案した協働性を測定する下記①～④の質問項目で単元の前と本時の後に調査する。

①みんなで協力して何かをやり遂げることが好きです。
②みんなで一緒に頑張れば、難しい課題でもできると思います。
③みんなで問題に挑戦するときは、進んで協力します。
④話し合いでは、誰かが発言した後、それに対する感想や意見をよく述べます。

【協働的な学びの姿（身体的な関わりを通して、他者と協力して課題に取り組んでいる姿）】

＜児童の具体の姿＞

主に試合中	**〇プレイ中、次に何をすればよいか分かり、動くことができる姿** **〇味方に、次、何をすればよいか声をかけている姿** ・味方がアタックを打ちやすいようにトスをしている →アタッカーが右利きだから、左利きだから、ネットから近くがいいから、遠くがいいから、などを考えてトスをしている姿 →アタッカーが打ちやすいように、ふわっとしたトスをしている姿 →コミュニケーションを行い、トスの行い方を考えている姿 ・味方がトスを上げやすいようにパスをしている →アタッカーから逆算して考え、どこでトスすればよいか分かりパスをしている姿 →コミュニケーションを行い、パスの行い方を考えている姿 →トスがよくなくて、アタックが失敗した際、セッターが謝っている姿 ・最初のキャッチが自分ではないと分かった時点での動きができる →トスやアタックに備えて動き始めようとしている姿 →トスやアタックに備えた動きを指示している姿
主に話合い中（参考程度）	**〇勝利に向かって話し合ったり仲間と関わったりすることができる姿** ・自分の考えを伝えることができる →チームの特徴に合った作戦を提案する姿 →試合での出来事をもとに、考えたことを伝える姿 ・相手の話を聞き、考えることができる →受け入れ、行動しようとしている姿 →話をもとに自分の意見を伝えようとしている姿 ・場の雰囲気を前向きにできる（試合中も） →喜んでいる姿 →仲間や相手を褒めている姿 →仲間や相手をなぐさめている姿 →ハイタッチをしている姿　　等